

郷土文化財紹介

石造物シリーズ

〈地蔵菩薩石像(地蔵さん)〉

坂下全域で見られる地蔵菩薩石像の数は、平成16年版「坂下町史」第9章宗教の石像文化財の項で見ると上野区3体、下組21体、合郷4体、町組14体で合計42体ある。坂下の石仏には如来、観音、明王などと120体ほどある中では地蔵菩薩石像が最も多いようである。地蔵菩薩はそれだけ身近で親しみやすい石仏なのでしよう。民衆を救う菩薩、子供を守る菩薩で路傍にあり〈お地蔵さん〉と呼ばれ親しまれている。

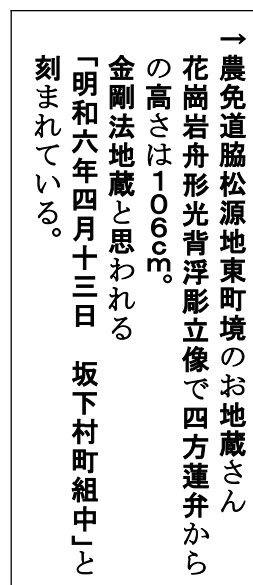


辞書などによれば地蔵三経の一つ「地蔵菩薩本願経」には善男善女のための《二十八種利益》が述べられているとある。沢山の御利益があり、多くを聞いて守り導いてくださる誠にありがたい菩薩である。頭を丸めた僧形で右手に錫杖(しゃくじょう)を左手に宝珠(ほうじゅ)を持って、あるいは合掌して路傍に立つ石仏姿を誰もが思い起こす。道祖神(どうそしん)と習合し道を尋ねられ無言で石頭と言われるが、子宝に恵まれるようになどの願掛けをされて、寒いからと赤い帽子や涎掛(よだれかけ)をしてもらい、花や団子が供えられ愛らしい一面

もうかがえる。集落の外れや峠にあるのは塞神(さいのかみ)として集落へ入ってくる厄災をさえぎる役割を果たしていると言われる。

ところで、坂下のお地蔵さんを形状で見ると舟形光背浮彫像が25体、丸彫り像15体、文字塔が2体である。舟形光背浮彫のお地蔵さんは花崗岩川原石を加工したものが多く、風化が進んでいてよく見ないと分別できない。丸彫り地蔵菩薩立像は8体ほどで堅い安山岩で作られているので形状はしっかりしているが、頭部欠損のものが幾つかある。丸彫り地蔵菩薩座像は7体である。

配置されているのは路傍ではなく、お堂や寺の境内、寺遺跡の傍ら、墓地の中などである。墓地に置かれたお地蔵さんの多くは童子等の供養、先祖供養のためであるのかもしれない。かつては路傍にあったものでも都合によりお堂や墓地へ移されたものもあるようだ。



寺跡などに残された地蔵群は六地蔵のようである。辞書などによれば、人は生前の行いにより地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人道、天道という六道のどこかに生まれ変わり苦しむという。六道の衆生の過ちを悔い改めさせ、苦しみから救い阿弥陀様の世界へ導く6体のお地蔵さんとある。順に檀陀(だんだ)地蔵、陀羅尼(だらに)地蔵、

宝印(ほういん)地蔵、地持(じじ)地蔵、除蓋障(じょがいしょう)地蔵、日光(にっこう)地蔵などと呼ばれ、手の形・持ち物は右手錫杖(しゃくじょう)と左手宝珠(ほうじゅ)、与願印(よがんいん)と宝珠(または合掌)、宝印(ほういん)と宝珠(ほうじゅ)、経箱(きょうばこ)と宝珠、施無畏印(せむ

いいん)と宝珠、経巻と宝珠(または数珠)などとある。宗派により15説の呼び名と形があるそうなので、様々な六地蔵があることになる。寺の参道や墓地の入口に配置されるのは、亡くなった方を救って下さるようにとの願いが込められているようだ。



↑ 万歳山長昌寺ゆかりの六地蔵。天神平(町組共同墓地)入り口にあったのではないかとされる。

《八田氏と曾我氏のお地蔵さん》

坂下町の石仏-町組之部(昭和60年坂下町文化を守る会編)によると阿弥陀瀬の八田氏墓地内に丸彫り座像のお地蔵さんがあり、背面に「寛延四辛未天八月廿四日 八田氏」(1751年8月24日)と刻まれていると記録されています。確認に出かけ近所の人と墓地内を探したが見つけることは出来ませんでした。どこかへ移動されてしまったようです。上記書籍の中には次のような正面見取り図があります。非常に穏やかな顔つきですが内縛印(ないばくいん)を結ぶ姿は何らかの決意を意味するのでしょうか。

このお地蔵さまと同じ年に造られた三井寺のお地蔵さまがあります。これには「寛延四辛未年七月(1751年7月)施主曾我氏」と刻まれています。塔身35cmの丸彫り座像で合掌し静かに座しているようです。

→ 八田氏のお地蔵さん
内縛印を結び、一族の何らかの決意を込めたのであろうか。
塔身30cm、溶岩丸彫り座像



→ 曾我氏のお地蔵さん
合掌し合掌し行く末の繁栄を願っているのか。
塔身35cmの花崗岩丸彫り座像



1600年代の坂下村は苗木藩の中で新田開発が可能な地域と見なされ、藩主からの開発仕置書が出されました。開発が進み元禄時代(1600年代後期)には、坂下村は苗木藩きっての米所となります。

八田氏は1600年代半ばより万場平(今の相沢、中之垣外の一部、新田の一部と思われる)に入り開拓を進めてきた一族

のようです。1700年代前半には町組庄屋職を務めるほどの有力者でした。その後何らかの理由で八田氏の力が徐々に衰えて行きました。宝暦9年(1759年)正月に八田氏の守護神であろう星の宮神社を再興し家内安全を願い、湯立祭を行うと誓っています。翌10年6月に湯釜を十二双八幡宮(今の坂下神社)に奉納し村中の息災と繁栄を祈願しています。並々ならぬ決意が伺えます。しかし、庄屋職を務めると財力を使い果たし交代することはよくあったようです。

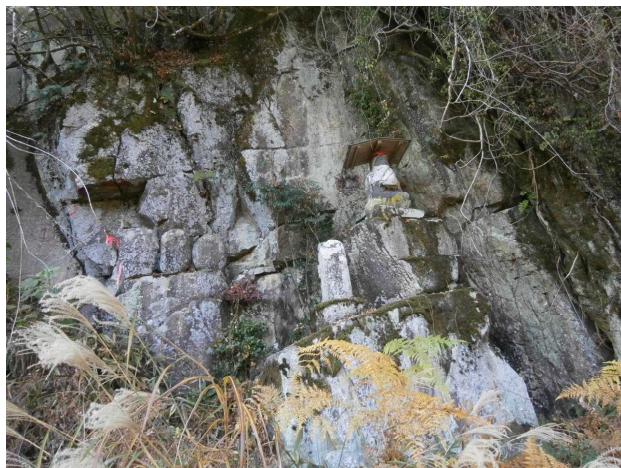
1740年頃(元文ないし寛保ごろ)苗木狩宿から曾我源左衛門が移動して来ます。曾我氏は中野方村で代々被官百姓を務めていた名家でした。財力と才覚を兼ね揃えて

おり、坂下村の有力者とも繋がりを作りながら分家を次々と独立させ、町平から中之垣外の一部に一気に勢力を広げてゆきます。1700年代中頃には上井用水開設工事で曾我氏が活躍し、町組の開発において貢献しました。そして、その後町組の庄屋職は分家と交代しながら、曾我氏が代々担うことになり明治維新まで続けて務めました。

このような両家が、1751年の7月と8月に地蔵菩薩座像を建立しました。曾我氏は祈祷寺三井寺に建立し行く末をお守り下さいと願ったのでしょうか。八田氏は墓地内に建立し先祖供養を行ったのでしょうか。両家の交代を想像させられるお地蔵さんです。

《横吹(よこぶき)のお地蔵さん》

下外の南端部から瀬戸へ通ずる道路を瀬戸境の近くまで進むと左側は外川の深い谷、その上に中央線線路が見られ、反対側は大きな岩盤になっています。その岩盤にへばり付いて通称《横吹地蔵》が道路を見下ろしています。



↑横吹の岸壁。上方に地蔵石仏が小さく見える。

このお地蔵さんは高さ80cm幅50cmの丸彫り座像で、後ろに小さな屋根を背負い赤い帽子と涎掛けを付けてもらっています。延享元年(1744)4月24日から握の人達を中心に祭りを行って今に至っていると聞きます。その様子は稲熊万栄氏の絵画で見ることができます。



←横吹地蔵
 延享元年甲子四月廿四日 當清水掘出建立 願主吉村八郎右衛門 泉石工平兵衛と刻まれる。
 高さ80cm、幅50cm、丸彫り座像



→横吹地蔵祭風景(稲熊万栄画伯作) 険しい道筋での直会で、一重携帯で酌み交わし和んでいる。

横吹地蔵が作られた経緯は「坂下の屋号・地名考」(16年版坂下町史編纂委員会)で見ることができます。

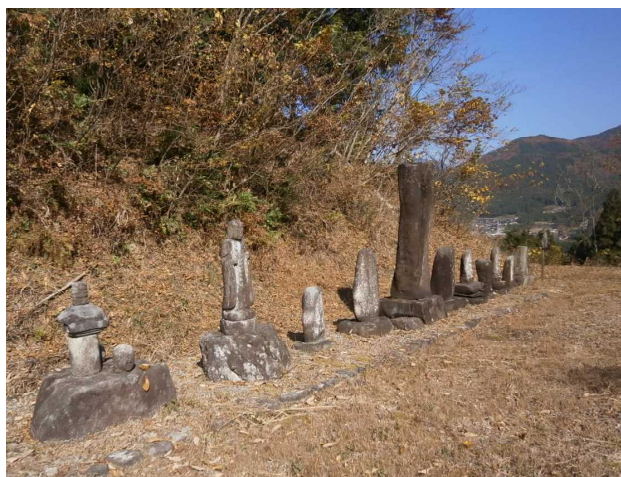
「下屋(しもや)と外洞川を挟んだ瀬戸街道沿いの分岐点近くを横吹と呼ぶ。同地点の延長線上に横吹地蔵尊が街道沿いに祀られている。そこは瀬戸街道最難所の岩場で、街道のできる以前は難儀な所で何度となく岩雪崩(いわたれ)が起き、多くの犠牲者を出している場所でもあった。横吹とは元来は岩雪崩の起きる難所の呼び名と言われる。苗木藩としても高峰山越えの難所を避けて、何とかして短距離で安全な街道をと計画を立て、坂下下組および瀬戸村に工事への協力方を申し入れた。そこで双方の組より二〇余名の人々が出役し作業を行うこ

ととなった。岩場の工事の安全を祈禱する地蔵尊を和泉の石工森平兵衛率いる石工連に依頼するとともに、危ない岩棚の掘削は両組から出役する人々と石工連が協同して進められた。工事の安全を祈念する地蔵尊の完成を急ぐとともに、携わった二〇余名の見事なチームワークが難所工事を完成させることとなるが、これは見逃せない史実の一つである。指揮はもちろん下組・瀬戸組の庄屋・組頭であるが、総元締めとして下組庄屋吉村八郎右衛門秋信であったと記録される。」

《聖鑑坊のお地蔵さんと

阿弥陀様前のお地蔵さん》

故原寛メモによると、聖鑑坊(せいかんぼう)のお地蔵様は横吹地蔵を建立した下組庄屋吉村八郎右衛門秋信の父八郎右衛門朝貞が、享保14年(1729年)8月堺の石工三宅六兵衛に依頼して建立したものだそうです。



↑ 字名「聖鑑坊」の石造物の風景
よく整備され花見に良いところである。

古老の話によれば、握から瀬戸へ通ずる古道の峠に建てられた峠のお地蔵さんで、道祖神(塞ノ神)でもあり外部から厄災が侵入することを防ぐ役割を担ったものだそうです。この古道は握地内にある中央線のトンネルの下方に通じ、外川を渡って横吹(字名)に入り横吹のお地蔵さんの前を歩いてきたそうです。峠の部分は昭和の不況時に

掘り割り工事がなされたようです。さらに道路改修工事がなされており今は峠の面影もありません。

聖鑑坊と言われる字名とも人の名前とも区別できない呼び名のものは、大きくて立派な自然石の古い石碑のことで文字が刻まれています。一説に南北朝の伝承があり、いわくありがたな雰囲気を持った石碑です。この地は掘り割り工事や道路改修後、何年かして整備され10基ぐらいの石造物が集められて握自治会の人達によって守られてきています。聖鑑坊のお地蔵さんの塔身(身長)は103cmで顔立ちもよく坂下の丸彫り地蔵菩薩像では最も大きなものの一つです。



← 聖鑑坊のお地蔵さん
鶴亀地蔵と思われるが、錫杖が失われている。
峠の道祖神として外部からの災厄を防ぎ、握平を守ってきたのであろう。
蓮華台座含めて123cmの丸彫り立像。
「享保十四己巳天八月吉日當村中」の銘あり

これと瓜二つのお地蔵さんが西方寺の阿弥陀様の前に立っておられます。やはり塔身は108cmで坂下での大きな丸彫り地蔵菩薩立像の一つです。享保14己酉暮秋如意日庄六良謹造(1729年9月吉日庄六良が願主で造った)とあります。どちらも右手に錫杖を左手に宝珠を持つ鶴亀地蔵と言われるお地蔵様で顔かたち、立ち姿がそっくりです。それもそのはずです。川上に居た堺の石工三宅六兵衛の手になるものだからです。西方寺のお地蔵さんは、ここで信心すればお地蔵さんに導かれて阿弥陀様の世界へ旅立てることを意味するものと考えられます。今も信心しておられる方が見えるようです。

→西方寺「阿弥陀様」前のお地蔵さん
鶴亀地蔵とされている。左手の宝珠が欠損。西方浄土への道案内地蔵として信仰を集めてきたと思われる。
蓮華台座含めて132cmの丸彫り立像
「享保十四己酉年暮秋如意日庄六良謹造」銘あり



《首なし地蔵さん》

鎌田宮雄著「ふるさと坂下」の中に首なし地蔵のお話がありますので、冒頭部分を以下に引用させていただきます。

「握の陸橋から折れて、吉村正美さんの前の竹藪の隅に、首なし地蔵が建立されております。

もともと、この地蔵様は、現在の場所より五十メートルほど離れた水車屋敷にあったのです。この場所にあったのは、木曾川を渡し舟(今のつり橋附近)で来て、登りつめる辻に祀られていたのです。それは、村の衆や旅人が安心して渡れるように祀りこまれたのでしょう。



↑右側が竹藪、中央柿の木の位置から左側に水車小屋があったとされる。路は船着き場からの古道である。西方寺、坂下の町へと通じていた。

この地蔵様は、安永三甲午年三月(1774年)に握平中の人達の手で建立されたものです。



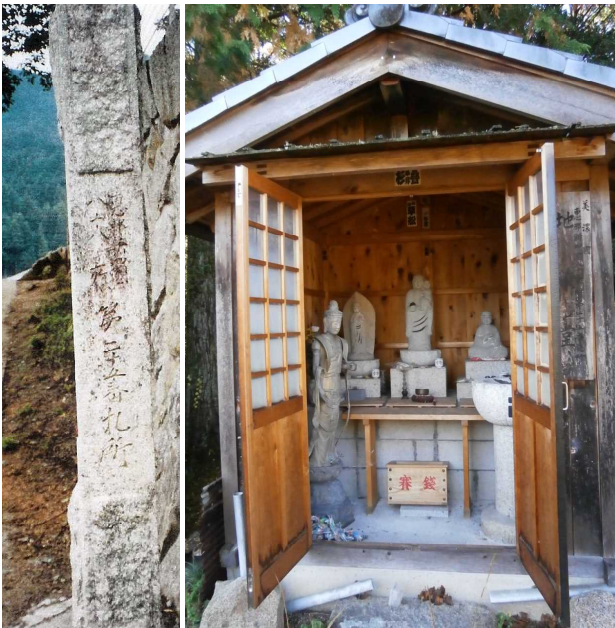
←俗称「首なし地蔵」
今では頭部が修復され、握字観音畑の下方墓地内に祀られている。
塔身76cmの花崗岩丸彫合掌地蔵。
基壇右に「講中八人夜念仏平中」、左に「安永三 三月(1774年3月)と刻まれる。道行く人々の平安を願ったのであろう。」

首なし地蔵といういわれは、きっと廃仏毀釈で打ち崩されて、明治以降放置されているうちに、土地の人たちによって、何時しか知らぬうちに名付けられたものだと思います。

その後、首のない地蔵様に、何んとか首をつけてやりたいと考えられ、近くの吉村正美さんが、昭和四十四年に苦心に苦心を重ねて石を刻んでつけられたのです。」

《金龍山三井寺地蔵堂(きんりゅうざん
さんせいじじぞうどう)》

稲荷山の金龍山三井寺は消失してしまいましたが隣接していた地蔵堂は消失を免れ今も残っています。ここは大正14年に定められた恵那郡新四国88カ所の25番札所です。この中には、当時の金龍山主任黒宮氏が勧請した子安地蔵菩薩立像(中央)、鶴亀地蔵菩薩立像(左)、弘法大師座像(右)が納められています。



↑左は、恵那郡新四国88ヶ所第二十五番札所を記す石柱。坂下保育園東入口に立つ。
右は、二十五番札所である三井寺地蔵堂とその内部。中央に子安地蔵、左に鶴亀地蔵、右に弘法大師像が配されている。



↑左は、子安地蔵菩薩立像
右は、鶴亀地蔵菩薩立像